

International Observership in HPB Surgery に参加して

広島大学大学院 医系科学研究科 外科学

岡田 健司郎

私は 2024 年 10 月から 2025 年 10 月までの 1 年間、日本肝胆膵外科学会 International Observership Program 第 14 回留学生として、米国 Mayo Clinic (Rochester, MN) に留学いたしました。留学期間中は、ホストドクターである Dr. Kendrick のもと、手術見学および臨床研究を中心に研修させていただきました。Dr. Kendrick の手術日(主に水・金曜日)を手術見学日、月・火・木曜日を臨床研究日にあて、1 年間継続的に取り組みました。

手術見学では、世界最高水準の腹腔鏡下膵臓手術—腹腔鏡下膵頭十二指腸切除術(Lap-PD)、腹腔鏡下尾側膵切除術(Lap-DP)、腹腔鏡下膵全摘術—を間近で学ぶことができました。標準的な Lap-PD は完全に定型化された手順のもとで行われ、精緻な剥離・切離、落ち着いたトラブルシューティング、正確かつスピーディーな運針技術が印象的で、まさに目からウロコの連続でした。IPMN など境界悪性腫瘍の症例では、3~4 時間で手術が完了し、同日に Lap-PD と Lap-DP を就業時間内に終えるという常識を覆す効率性に驚かされました。一方で膵癌に対しては、腫瘍の局在に応じた多彩な切除アプローチに加え、門脈・動脈の合併切除再建や SMA 神経叢切除(divestment)などの高度な手術手技がほぼ全て腹腔鏡下に行われ、その洗練された技術に大きな衝撃を受けました。さらに術前・術後にはショートディスカッションの時間を設けてくださり、手技の要点や腫瘍学的な考え方を丁寧にご教示いただき、非常に多くの学びを得ることができました。

また、Dr. Kendrick の卓越した手術技術を支えるチームの存在も強く印象に残りました。腹腔鏡手術のチームは operator、resident、surgical assistant (scoper)、nurse などで構成されており、とくに surgical assistant と nurse のサポート技術は秀逸でした。術者(Dr. Kendrick)が指示を出さずとも最適な視野が展開され、必要な器具が瞬時に手渡される—チーム全体が場の流れを読み合い、自然に協働している光景は、まさに世界最高峰の腹腔鏡下膵臓手術を支える根幹そのものであると実感しました。1 年間、この素晴らしい“Team Kendrick”の手術を見学できたことは、手術技術だけでなく、手術の総合力を学ぶ貴重な機会となりました。

Mayo Clinic での臨床研究は、主に 4 つのテーマに取り組みました。前半 6 か月は、PD 後膵液瘻に関する研究(膵液瘻リスクと膵液瘻の重症度の関連、PD 後の理想的アウトカムを生み出す因子の検証)を行い、後半 6 か月は、術前治療を行った膵癌に関する研究(術前化学放射線治療中の腫瘍マーカーの推移と予後との関連、術後感染と予後との関連)を行いました。

た。Mayo Clinic の貴重なデータを活用したこれらの臨床研究を通じて、多くの学びを得ることができました。臨床研究を進めるにあたり、Dr. Kendrick には Chair of Surgery というお立場で大変ご多忙にもかかわらず、私のために毎週 30 分間の個別ミーティングの時間を確保いただき、研究の進捗報告、軌道修正、発表・論文指導など多岐にわたり親身にご指導いただきました。私の拙い英語でいかに効果的に Discussion を行うか、理想的なプレゼンテーションとは何かなど、毎回の貴重な 30 分を“ベストな 30 分”とするために、私なりに 1 年間試行錯誤を重ねました。私の指導医の上村 健一郎先生のススメで、毎回のミーティングに PowerPoint を作成し、進捗状況をできるだけ簡潔かつ明瞭に伝える努力をしました。自己評価は甘いですが、留学開始当初と比較すると、少しは上達できたのではないかと感じております。留学期間中に開催された 2025 Annual Pancreas Club Meeting にて、膵液瘻リスクと膵液瘻の重症度の関連についての研究結果を口演発表させていただきました。

米国での生活は非常に充実していました。妻、長男(4 歳)、長女(1 歳)の家族 4 人で生活していましたが、慣れない異文化環境の中、「メイヨー日本人会」の多くのご家族の皆様と助け合い、苦楽を共にできたことは一生の宝物になりました。長男と長女も Preschool に馴染み、多くの友人ができ、幼い時期に国際的なつながりを経験できたことを、親としても大変嬉しく感じました。週末には複数の家族でメジャーリーグ観戦や屋外ランチに出かけ、vacation では米国の壮大な National Park の数々を家族で旅行し、とても楽しい時間を過ごすことができました。唯一無二の存在である家族の大切さと絆を、改めて再認識した 1 年でした。

最後になりますが、このような素晴らしい International Observership Program を創設し、継続的に支えてくださっている高田 忠敬先生をはじめ、遠藤 格 前理事長、大塚 将之 理事長、江口 晋 国際交流委員会委員長をはじめとした委員会の先生方、事務局の上大谷様、そして本プログラムに関わってくださった日本肝胆膵外科学会のすべての皆様にも心より感謝申し上げます。また、私の留学を快諾してくださった Mayo Clinic の Dr. Kendrick と、お世話になったすべての Mayo Clinic スタッフの方々にも心より感謝申し上げます。さらに、私の留学を支援してくださった広島大学外科学教室の高橋 信也教授、上村 健一郎准教授をはじめ、同教室の医局員・スタッフの皆様にも深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

図 1 Mayo Building 内の Dr. Kendrick のオフィス前にて



図 2 Saint Marys Hospital の手術室前にて



図 3 “1000 BEHEADING (膵頭切除+膵全摘)”達成



図 4 Rochester 空港にて(ミシシッピ川上空の周遊飛行後)



図 5 Yellowstone 国立公園にて(家族写真)

